

日本における意識動向の新たな断面

—— 人間関係観を中心として ——

統計数理研究所 坂 元 慶 行

(1983年12月 受付)

1. はじめに

世論調査が日本に導入されたのは終戦直後のことである。統計数理研究所では、この世論調査の方法によって日本人の意識の変化を計量的に追跡するために、戦後間もない昭和28年に「日本人の国民性調査」を開始した。以後、5年毎に全国調査を重ね、現在(昭和58年秋)第7次全国調査を実施中である。この調査は、上述の日本人の意識の計測という目的のほか、大規模な世論調査におけるサンプリング方式の開発、質問文や回答のとり方等調査法の検討、さらには統計的解析手法開発のための基礎データの提供、等多くの任務も担ってきた。

他の諸現象と同様、態度や意見もまた生成・発展・消滅という過程をたどって変化していく。農業人口の激減等に象徴される産業構造の高度化、都市化、核家族化、生活水準の上昇等、日本の戦後のこの30年間に経済社会的環境条件の激動期であったことを想起すれば、人間の意識もまた埒外にあるはずはなくことさらに大きく変動するであろうことは想像に難くない。しかしながら、だからといって調査の度に測定手段たる調査法、殊に質問文、を改変したのでは意識変化の計量的把握という所期の目的を達成することはできない。そこで、「日本人の国民性調査」では、昭和48年の第5次調査以降2組の調査票を用意し、一方の調査票では昭和28年の第1次調査の質問文を固定的に用いることによって以後の意識変化を追跡し、他方の調査票では新規の質問を用意し、新しい問題への対処や新たな視点からの吟味に当てることにしてきた。このほか、個々の検討課題に対しては数多くの吟味調査も行なってきたし、日本の国際舞台への進出に対応して意識の国際比較のための調査もアメリカで1回、ハワイで3回行ってきた。こうした配慮の下に実施されてきた昭和28年から昭和53年までの計6回にわたる調査結果の分析については統計数理研究所国民性調査委員会「第1～第4 日本人の国民性」をはじめとする多くの著作で詳細に報告されている。

本稿の目的は、現在実査中の第7次調査の準備のための質問文の二次分析で明らかになった意識動向の新たな断面の一端について述べることである。

そこで、まず次節で、継続して調査された質問項目の結果に依拠して、これまでの意識変化の主な特徴について述べる。しかしそれらは既に述べられているところであり(たとえば、統計数理研究所国民性調査委員会(1982)、坂元(1983)など)、本稿独自のものではない。著者の主張はつぎの第3節の後半部にある。

なお、特にことわらない限り、質問文・質問整理番号・結果数値等の詳細は上掲の統計数理研究所国民性調査委員会(1982)に掲載されているので参照されたい。

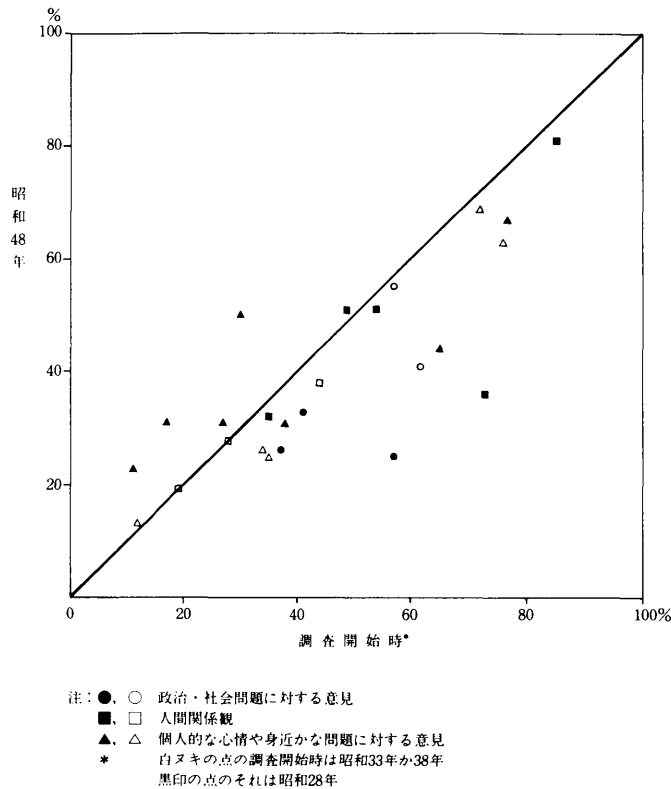


図1. 意見の変化（調査開始時から48年）

2. 戦後の意識変化の特徴

「日本人の国民性調査」で同じ質問文による回答が少なくとも昭和28年、48年、53年の3時点について得られている質問は16問ある。このほか、33年（もしくは38年）、48年、53年の3時点で回答が得られている質問が9問ある。ここで、16問については昭和28年を、9問については昭和33年もしくは38年を「調査開始時」と呼ぶことにする。これら25問のそれぞれについて、「調査開始時」に20歳台の支持率より50歳台の支持率の方が高かった回答肢を1つ選び^{※1)}、「調査開始時」と48年の支持率をそれぞれ横軸と縦軸に目盛ると図1が得られる。

この図で25点中17点是对角線より右下方に位置している。したがって、「調査開始時」に高年齢層に支持されていた意見は以後10～20年の間に総じて減少したことがわかる。逆に言えば、「調査開始時」に若年齢層に支持されていた意見にはいわば民主的、合理的、個人主義的なものが多く、このような民主的、合理的、個人主義的な意見が、以後全年齢層に浸透し、多くの人に支持されるようになったといえる。また、この図では、政治や社会問題に関する質問は●や○で、身近な人間関係観に関する質問は■や□で、その他の個人的な心情や身近な問題に関する質問は▲や△でしめされている^{※1)}。この図では対角線からの距離が遠い点ほど変化量が大きく、近い点ほど変化量が小さかったことを表わす。人間関係に関する意見は、「他人の子供を養子にする」という意見を唯一の例外として、他の全ての意見が対角線の間近に位置しているから、人間関係観は他の領域の意見にくらべて変化が小さかったことがわかる。

#2.4 暮らし方

〔リスト〕 人の暮らし方には、いろいろあるでしょうが、つぎにあげるものの中で、どれが1番、あなた自身の気持に近いものですか？

- | | |
|-------------------------------------|--------|
| 1 一生けんめい働き、金持ちになること | 8 D.K. |
| 2 まじめに勉強して、名をあげること | |
| 3 金や名誉を考えずに、自分の趣味にあった暮らし方をすること | |
| 4 その日その日を、のんきにクヨクヨしないですらすらすること | |
| 5 世の中の正しくないことを押しつけて、どこまでも清く正しくくらすこと | |
| 6 自分の一身のことを考えずに、社会のためにすべてを捧げてくらすこと | |
| 7 その他〔記入〕 | |

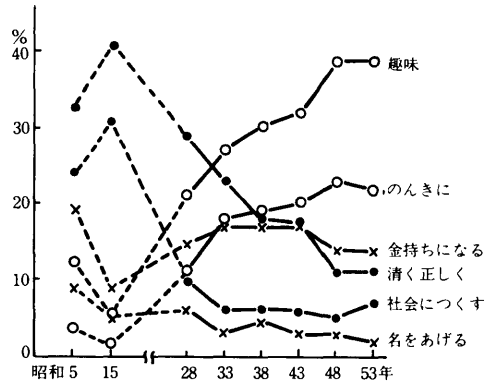


図2. 生活信条の変化

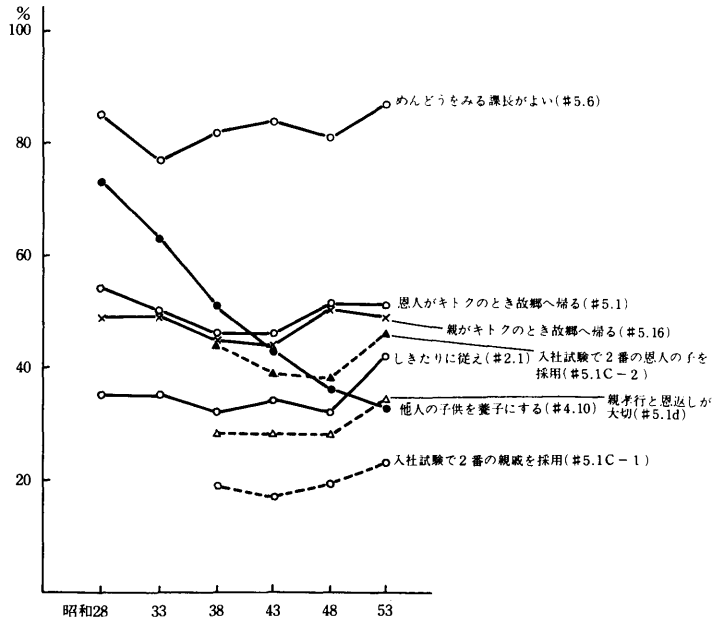


図3. 人間関係観の変化

以上から、「日本人の国民性調査」の継続質問による戦後の意識変化の第1の特徴は、政治・社会問題に対する意識や個人の生活信条等が大きく変ってきたのに対し、身近かな人間関係観には大きな変化が見られないということである。すなわち、政治意識は非民主的な考え方から民主的な考え方へ、さらには非政治的な考え方へ、と大きく変り(坂元(1983))、生活意識も、関連する質問の一例として個人の生活信条の変遷をしめした図2からもわかるように^{#2)}、「イエ」・金・出世主義といった社会的な束縛から次第に自由になってきている。これに対し、人間関係観は、図3として再掲したように、総じてその変化の幅が小さく、依然として旧来の人間関係温存型の意見は減ってはいない。この意味で、人間関係観の分析が日本人の意識構造を解明する上で極めて重要であると考えらる。

中根(1967)の「タテ社会」、土居(1971)の「甘え」、浜口(1982)の「間人主義」等に見られるように、日本人論に関する従来の多くの文献で人間関係の形態に関わる概念が日本人説明のいわばキー概念として提唱されてきた。たとえば浜口は「間人主義」についてつぎのように述べている。「西洋文化の中核とも言える『個人主義』は自己中心主義、自己依拠主義、対人関係の手段視の3つの属性を備えている」のに対し、日本を特徴づける「間人主義」は「これらと対照的な相互依存主義、相互信頼主義、対人関係の本質視の3属性を有している。」そして対人関係の手段視をつぎのように規定している。「自立した『個人』どうしの関係は、原則的に互酬的な利益交換(ギブ・アンド・テーク)を目的とするものであるから、関係自体は、そのための手段であるにとどまる。したがって対人関係は、自己目的化することではなく、戦略的に有益もしくは有効であるか否かという視角から、手段視して評価される。」一方、対人関係の本質視とはつぎの意味である。「相互信頼のうえに成り立つ対人関係は、操作的に扱われるのではなく、それ自体が値打ちをもつものとして高く評価され、当該の『間柄』の持続が無条件で望まれることとなる。相互の連関性は、手段ではなく、即自的な価値を帯びる、と見なされる。」上述の調査結果はこのような所説と符合的であるかのように見える。

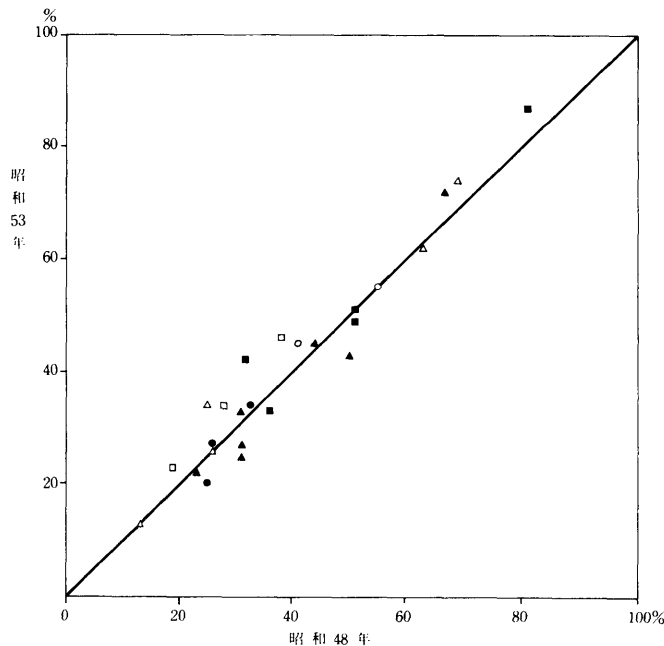


図4. 意見の変化(48年から53年)

意識変化の第2の特徴は、図1でとりあげた25の項目の昭和48年から昭和53年までの変化を追った図4に現れている。この図は、「調査開始時」から昭和48年までの10~20年間に減りつづけた意見の過半数が増勢に転じたことをしめしている。すなわち、第2の特徴は、意見変化のパターンが2つの局面に分けられることで、最近時(昭和53年)の調査では多くの質問に関していわゆる伝統回帰的な現象が現われている。この傾向は変化が相対的に小さかった人間関係観についても例外ではなく、既出の図3に見られるように、総じて時系列的にU字型の軌跡を描いていわば伝統的な意見に回帰している。

以上の考察に基づいて日本人の意識の現状を概括すると、第1に、それが新しい政治社会意識・新しい生活感覚と古い人間関係観の奇妙とも見える並存状況にあり、第2に、最近、伝統回帰的な現象が見られる、ということになる。重要なことは、継続質問に依る限り、このような伝統回帰的な現象が中高年齢層だけでなく若年層にも共通に見られ、旧来の人間関係重視型の意見が高年齢層にくらべて決して少なくない、という点である。

3. 意識動向の新たな断面

前節で述べたような意識の変化が時代の変化、世代の交代、加齢効果のうちどの要素によって促進されたかは質問によって異なり一概には言えない。(中村(1982, 1983)はこの側面から個々の継続質問を分析し、興味深い結果を得ている。)しかしいずれにせよ、日本では、若年、高学歴層に受け入れられ始めた意見が中高年、低学歴層へと広がる傾向が考えられる。この意味で若年層の意見は将来の世論の予兆として重要な意味をもつ。この節では最近の若者の意識に焦点を絞って、その実相と変化の可能性について考察してみたい。

第1節で述べたように、「日本人の国民性調査」では48年以来2組の調査票を用意し、一方の調査票(K型調査票と呼ぶ)で28年時の質問文を固定的に用いて以後の変化を追跡し、他方の調査票(M型調査票)を新しい問題への対処や新たな視点からの吟味に当ててきた。つぎの質問はこのような経過をたどった例の1つで、昭和28年以来の質問文はつぎのとおりである。

#5.6 めんどくみる課長

〔リスト〕 ある会社につぎのような2人の課長がいます。もしあなたが使われるとしたら、どちらの課長につかわれる方がよいと思いますか、どちらか1つあげて下さい?

- | | |
|---|--------|
| 1 規則をまげてまで、無理な仕事をさせることはありませんが、仕事以外のことでは人のめんどくを見ません | |
| 2 時には規則をまげて、無理な仕事をさせることもありますが、仕事のこと以外でも人のめんどくをよく見ます | |
| 3 その他〔記入〕 | 4 D.K. |

結果は、図3にも示されているように通時的に約8割の人に第2の回答肢の「人情課長」が選ばれており、この支持率は年齢、性、学歴、職業、市郡別居住地等にほとんど左右されない。この結果について西平(1980)はつぎのように述べている。「世論調査で、8割以上のコンセンサスが得られることは、そうあることではない。この結果は、その稀な例である。そこで日本人は、いまでもやはり義理人情にひかれるということになる。この質問を25年余り前に私達が作ったとき、当時は人情課長の方が、当然人気があるものと考えていた。しかしだんだん個人の生活と、企業内での関係は別だ、という考えがふえ、ドライな課長の方へ、人気が移るものと予想していたのである。それにもかかわらず、25年、6回にわたる調査で、そのようなきざ

しは見られない。もちろん質問文が妙なニュアンスをもつせいとも考えられるが、この質問については、表現をいろいろかえた調査を何回もおこなってきたのである。」つぎのような質問が昭和53年のM型調査票に採り入れられたのはこうした事情の考慮に基づく。

5.6 e 課長——ヨメの世話

5.6 f 課長——引越し

- a 友達と雑談していたとき、その友達が自分の会社についてこんなことをいったとします。
「うちの会社では、課長が何人もの部下のおヨメさんの世話をした」
というのです。こういう会社は、「いい感じ」がしますか、それとも、「いやな感じ」がしますか？
- b では、
「うちの会社では、課長が引越した、といえ、部下の方から進んで手伝いに行く」といったら、
こういう会社は「いい感じ」がしますか、「いやな感じ」がしますか？

1 いい感じ	2 いやな感じ
3 その他〔記入〕	4 D.K.

この結果、嫁の世話では45%の人が、課長の引越しでは58%の人が「いい感じ」を選択し、対象者全体について見れば多数意見を成す。また、つぎの質問もこれに関連して53年調査に加えられた。

5.6 b つとめたい会社

〔リスト〕 つぎのような2つの会社があるとします。もしあなたがつとめるとしたら、どちらの会社の方がよいですか？

1 給料は多いが、レクリエーションのための運動会や旅行などはしない会社	
2 給料はいくらか少ないが、運動会や旅行などをして、家族的な雰囲気のある会社	
3 その他〔記入〕	4 D.K.

この質問に対する回答も前の2問と同様の傾向をしめし、「家族的な雰囲気のある会社」(78%)が圧倒的に選好されている。注意すべきことは、これら3問による吟味にもかかわらず、最初の「ヨメの世話」の質問をのぞいて、年齢による意見差がほとんどないことである。このような結果は、個人生活と職場での人間関係を分離せず依然として多くの日本人が両者が一体化した思考をする、という所説をますます補強しているという印象を与える。

では一体年齢差はどのような質問に端的に現れるのであろうか。昭和53年のM調査票に対する回答者のうち20歳台と50歳台の人だけをとりあげ、その調査票に採用された全ての質問項目のうちどの項目がこの2つの年齢層で際立った相異を見せるのか、を検討してみた。言葉を換えると、20歳台と50歳台の人しかいない集団からサンプルを1人選んだとき、その人がどちらの年齢層に属するかを言い当てるにはどのような質問をすればよいのか、が問題である。表1, 2は、このような目的のために開発されたプログラムCATDAP(坂元(1980), 桂・坂元(1980))によるアウトプットである。

表1は、目的変数(ここでは年齢層)と各説明変数とによってつくられうる2次元クロス表すべての間でAIC(たとえば坂元・石黒・北川(1983))の値を比較し、AICの値の小さい順に

表1. LIST OF EXPLANATORY VARIABLES ARRANGED IN ASCENDING ORDER OF AIC

RESPONSE VARIABLE	(NEWRE)	NUMBER OF CATEGORIES OF EXPLANATORY VARIABLE	A I C	DIFFERENCE OF AIC	
1	GAKUR	5	-179.07	0.0	(学歴)
2	#7.4 HANEI	3	-94.40	84.67	(国が繁栄すれば国民の生活もよくなるか)
3	#6.6 TOHYU	3	-86.23	9.17	(総選挙の投票意欲はどの程度か)
4	#2.11 KUKAS	3	-75.14	11.09	(人のためにはならなくても自分の好きなことしたいか)
5	#9.12GEI	5	-74.19	0.95	(日本の芸術の評価)
6	#9.12KUKOKU	5	-45.57	28.62	(日本の心の豊かさの評価)
7	#7.22OKANE	5	-38.49	7.08	(万金か)
8	#7.18YASU	4	-35.76	2.74	(心の安らかさはますます思うか)
9	#7.23JIKU2	3	-33.01	2.75	(旅行中の事故で親は先生の責任追求するか)
10	#9.12KEIJA	3	-30.26	2.74	(日本の経済力の評価)
11	#7.5 KDKI	5	-29.91	0.35	(公益と個人の権利のどちらを優先すべきか)
12	#2.13SUNAE	3	-28.49	1.43	(若いときは将来に備えるべきか楽しむべきか)
13	#7.5 KUKYC	3	-27.60	0.09	(公益と個人の権利のどちらが軽視されているか)
14	#8.7 SEITO	4	-27.58	0.02	(支持政党)
15	#8.9 FUMAN	5	-26.44	1.14	(社会不満に対してどの程度の直接行動をとるか)
16	#7.18ZIVU	4	-26.41	0.04	(人間の自由はぶええると思うか)
17	#3.9 ISE	5	-25.87	0.54	(首相は伊勢参りに行くべきか)
18	#9.12LEVEL	5	-24.12	1.75	(日本の生活水準の評価)
19	#9.13BUNKA	3	-20.18	3.94	(日本文化に国際性があるか)
20	#9.12KAGAK	5	-18.55	1.62	(日本の科学技術の水準の評価)
21	#4.13SOTSU	3	-18.14	0.41	(卒業後も親をたよってよいか)
22	#4.13OUME	3	-16.98	1.17	(嫁入り後も親をたよってよいか)
23	#7.21MURAU	3	-15.82	1.16	(どんな人でも金貰えば悪い気はしないか)
24	#7.20SEKI	5	-15.33	0.49	(人の身の上には起ることは全てその人の責任か)
25	#7.18KOFUK	4	-14.36	0.97	(ひとびとは幸福になると思うか)
26	#4.15HUSU	3	-13.43	0.92	(子供が事件を起したなら親もテレビに出すべきか)
27	#7.18KENKQ	4	-12.61	0.83	(人間の健康の面はよくなると思うか)
28	#6.2 UMARE	3	-11.78	0.82	(男と女のどちらに生れかわりたいか)
29	#7.21MUKI	3	-10.99	0.79	(無理をしても金を稼ぐ必要があるか)
30	#5.163PAN	3	-10.32	0.68	(3万円借りて借書要求されたら不愉快か)
31	#7.19SAIING	3	-10.23	0.08	(人の成功には才能と運のどちらが大きい)
32	#7.21KICHO	3	-10.21	0.02	(金にきまようめんな人には親しみがわかないか)
33	#2.3 SYAKA	5	-9.54	0.67	(社会にどの程度満足か)
34	#7.21DARAK	3	-8.32	0.02	(金に恵まれると卑落するか)
35	#5.22TAYOR	3	-8.69	0.03	(人と人間どうしのつなかりとどちらが頼りになるか)
36	#5.21IHAN	4	-7.55	1.34	(課長の選挙違反を警察にしやべるか)
37	#7.16HIKOK	3	-6.48	0.86	(事故を起した社長はますますあやまらまわらるべきか)
38	#6.2 TANG	4	-5.67	0.01	(男と女のどちらが楽しみが多いか)
39	#7.18SEIKA	4	-4.74	0.93	(ひとびとの生活はよくなると思うか)
40	#2.3 KATEI	5	-3.86	0.00	(家庭にどの程度満足か)
41	#7.21KUUN	3	-3.18	0.00	(稼いだ金は幸運で得た金より価値があるか)
42	#4.14ZASSI	3	-1.59	1.60	(不用品を子供が売ったらやめさせるか)
43	#5.17CHUI	3	-0.38	1.01	(社会生活では互いに注意しあうべきか)
44	#6.2 KUKU	3	0.46	0.64	(男と女のどちらが苦勞が多いか)
45	SEI	2	1.90	1.45	(性)
46	#7.23JIKU1	3	2.22	0.31	(旅行中の事故は先生に責任あるか)

表2.

	(年 齢)		計 (該当 サンプル数)	
	20歳台	50歳台		
(学 歴)				
1. 小 卒	1.9%	98.1%	100.0%	53
2. 中 卒	35.5	64.5	100.0	172
3. 高 卒	72.7	27.3	100.0	289
4. 大 卒	81.2	18.8	100.0	181
5. D.K.	75.0	25.0	100.0	8
計	60.5	39.5	100.0	703
(#7.4 繁栄)				
1. 生活よくなる	79.2	20.8	100.0	336
2. 生活よくなる	42.6	57.4	100.0	338
3. 他, D.K.	51.7	48.3	100.0	29
計	60.5	39.5	100.0	703
(#8.6 投票)				
1. なにをおいても投票	40.9	59.1	100.0	259
2. なるべく投票	66.9	33.1	100.0	362
3. あまり投票しない	92.9	7.1	100.0	56
4. ほとんど投票しない	95.7	4.3	100.0	23
5. 他, D.K.	100.0	0.0	100.0	3
計	60.5	39.5	100.0	703
(#2.1 好きにくらし)				
1. 自分の好きなこと	78.5	21.5	100.0	307
2. 人のためになること	44.7	55.3	100.0	320
3. 他, D.K.	53.9	46.1	100.0	76
計	60.5	39.5	100.0	703
(#9.12 芸術)				
1. 非常によい	60.2	39.8	100.0	133
2. ややよい	58.9	41.1	100.0	382
3. ややわるい	88.9	11.1	100.0	99
4. 非常にわるい	86.7	13.3	100.0	15
5. 他, D.K.	25.7	74.3	100.0	74
計	60.5	39.5	100.0	703

(以下略)

説明変数を配列し直したものである。小さいAICの値をもつ説明変数ほど目的変数に対して多くの情報をもつと考えられるから、表1は以下のことをしめしている。すなわち、「年齢層」に対して最も多くの情報をもつ説明変数は「学歴」で、以下、#7.4b「国が繁栄すれば国民の生活はよくなるか」、#8.6「総選挙の投票意欲はどの程度か」、#2.11「人のためにはならなくても自分の好きなことをしたいか」、#9.12b「日本の芸術の評価」、…と続いている。表2は表1の順位に対応して個々のクロス表をしめたもので、これから、たとえば「学歴」については、大卒なら81.2%が20歳台であるのに対し、中卒ならわずか35.5%が20歳台であり、等のことが判明する。また、第2位の質問については、「国が繁栄しても国民の生活はよくなる」と答

表 3.

RESPONSE VARIABLE :		NENRE				
EXPLANATORY VARIABLE				NUMBER OF CATEGORIES OF EXPLANATORY VARIABLE(S)	A I C	DIFFERENCE OF AIC
1	#7.4 HANEI #2.11KURAS #9.12GEI			45	-150.06	0.0
2	#7.4 HANEI #2.11KURAS			9	-149.82	0.24
3	#7.4 HANEI #2.11KURAS #7.5 KOKYO			27	-146.23	3.59
4	#7.4 HANEI #2.11KURAS #7.23JIKO2			27	-144.58	1.65
5	#7.4 HANEI #2.11KURAS #9.13BUNKA			27	-143.63	0.95
6	#7.4 HANEI #9.12GEI			15	-143.54	0.10
7	#7.4 HANEI #8.6 TOHYO			15	-143.46	0.07
8	#7.4 HANEI #2.11KURAS #6.2 UMARE			27	-143.27	0.19
9	#7.4 HANEI #2.11KURAS #5.22TAYOR			27	-141.47	1.60
10	#7.4 HANEI #2.11KURAS #7.21DARAK			27	-140.69	0.78
11	#7.4 HANEI #2.11KURAS #7.5 KOEKI			27	-139.79	0.91
12	#7.4 HANEI #2.11KURAS #7.21MURI			27	-139.54	0.25
13	#7.4 HANEI #2.11KURAS #6.2 KURD			27	-137.49	2.05
14	#2.11KURAS #9.12GEI			15	-137.48	0.01
15	#7.4 HANEI #2.11KURAS #4.13SOTSU			27	-136.58	0.91
16	#7.4 HANEI #2.11KURAS #4.13UYOME			27	-136.22	0.36
17	#7.4 HANEI #2.11KURAS #2.13SONAE			27	-136.19	0.03
18	#7.4 HANEI #2.11KURAS SEI			16	-135.65	0.55
19	#7.4 HANEI #2.11KURAS #7.18YASU			36	-135.44	0.21
20	#7.4 HANEI #2.11KURAS #5.21IHAN			36	-135.23	0.21
21	#7.4 HANEI #2.11KURAS #4.15HOSO			27	-134.08	1.15
22	#7.4 HANEI #2.11KURAS #7.18ZIYU			36	-132.78	1.30
23	#7.4 HANEI #2.11KURAS #7.21KICHO			27	-132.23	0.55
24	#7.4 HANEI #2.11KURAS #6.2 TANU			27	-131.46	0.77
25	#7.4 HANEI #2.11KURAS #7.19SAINU			27	-130.48	0.97
26	#7.4 HANEI #2.11KURAS #8.6 TOHYO			45	-129.63	0.85
27	#7.4 HANEI #2.11KURAS #7.21MORAU			27	-129.18	0.45
28	#7.4 HANEI #2.11KURAS #7.23JIKO1			27	-127.97	1.21
29	#7.4 HANEI #2.11KURAS #7.16HIKOK			27	-127.95	0.03
30	#7.4 HANEI #2.11KURAS #4.14ZASSI			27	-126.83	1.12
31	#7.4 HANEI #2.11KURAS #5.17CHUI			27	-124.17	2.66
32	#7.4 HANEI #2.11KURAS #7.22UKANE			45	-122.49	1.67
33	#7.4 HANEI #2.11KURAS #7.18SEIKA			36	-120.55	1.94
34	#7.4 HANEI #2.11KURAS #5.163MAN			27	-120.44	0.11
35	#7.4 HANEI #2.11KURAS #9.12KOKOR			45	-119.28	1.16
36	#7.4 HANEI #2.11KURAS #7.18KENKU			36	-118.80	0.48
37	#7.4 HANEI #2.11KURAS #9.12KEIZA			45	-118.28	0.52
38	#7.4 HANEI #7.23JIKO2			9	-117.21	1.07
39	#7.4 HANEI #2.11KURAS #7.21KOUN			27	-116.75	0.46
40	#7.4 HANEI #9.12GEI SEI			30	-115.99	0.77
41	#7.4 HANEI #7.5 KOEKI			9	-115.84	0.15
42	#7.4 HANEI #2.11KURAS #3.9 ISE			45	-115.47	0.37
43	#7.4 HANEI #9.13BUNKA			9	-114.83	0.64
44	#7.4 HANEI #7.22OKANE			15	-114.78	0.05
45	#7.4 HANEI #9.12KEIZA			15	-114.11	0.67
46	#7.4 HANEI #2.11KURAS #8.9 FUMAN			45	-112.57	1.55
47	#7.4 HANEI #2.11KURAS #9.12KAGAK			45	-112.22	0.35
48	#7.4 HANEI #2.11KURAS #8.7 SEITU			36	-112.10	0.12
49	#7.4 HANEI #2.11KURAS #7.18KOFUK			36	-111.61	0.48
50	#7.4 HANEI #5.21IHAN			12	-111.26	0.36
51	#2.11KURAS #9.12GEI SEI			30	-110.31	0.94
52	#7.4 HANEI #7.18YASU			12	-109.17	1.15
53	#7.4 HANEI #5.22TAYOR			9	-109.13	0.04
54	#7.4 HANEI #7.18ZIYU			12	-107.31	1.82
55	#7.4 HANEI #2.13SONAE			9	-107.12	0.18
56	#7.4 HANEI #7.21DARAK			9	-106.49	0.64
57	#7.4 HANEI #9.12KOKOR			15	-105.60	0.89
58	#7.4 HANEI #2.11KURAS #9.12LEVEL			45	-103.17	2.43

(以下 略)

えれば 79.2% が 20 歳台であるのに対し、「よくなる」と答えれば 42.6% が 20 歳台であり、等のことがわかる。さらに、「投票意欲」も弱い方が若者に多く、「人のためにはならなくても自分の好きなことをしたい」という回答も断然若者に多い。

つぎに、意見に関する項目ではないので「学歴」を除外することにして、やはり CATDAP によって、どのような質問項目の組合せが最も良く 2 つの年齢層を識別するかを探すと、表 3 のように、上記の #7.4b「繁栄」と #2.11「好きなくらし」、もしくはさらに #9.12b「芸術」を加えたもの、がキー項目になっている。いわば国に背を向け、社会に背を向けるという態度の強弱が、あるいは、没社会的・孤立的な価値観の偏重度が、老若 2 層を識別するうえで有効な指

NO.	CLASS BOUNDARIES	ESTMATED PROBABILITIES	ESTMATED PROBABILITIES						
			0.0	0.2000D+00	0.4000D+00	0.6000D+00	0.8000D+00	0.1000D+01	
1	0.1950D+02-0.2050D+02	0.29750+00							
2	0.2050D+02-0.2150D+02	0.30450+00							
3	0.2150D+02-0.2250D+02	0.31160+00							
4	0.2250D+02-0.2350D+02	0.31880+00							
5	0.2350D+02-0.2450D+02	0.32600+00							
6	0.2450D+02-0.2550D+02	0.33340+00							
7	0.2550D+02-0.2650D+02	0.34080+00							
8	0.2650D+02-0.2750D+02	0.34830+00							
9	0.2750D+02-0.2850D+02	0.35590+00							
10	0.2850D+02-0.2950D+02	0.36350+00							
11	0.2950D+02-0.3050D+02	0.37120+00							
12	0.3050D+02-0.3150D+02	0.37900+00							
13	0.3150D+02-0.3250D+02	0.38680+00							
14	0.3250D+02-0.3350D+02	0.39460+00							
15	0.3350D+02-0.3450D+02	0.40270+00							
16	0.3450D+02-0.3550D+02	0.41070+00							
17	0.3550D+02-0.3650D+02	0.41880+00							
18	0.3650D+02-0.3750D+02	0.42690+00							
19	0.3750D+02-0.3850D+02	0.43500+00							
20	0.3850D+02-0.3950D+02	0.44320+00							
21	0.3950D+02-0.4050D+02	0.45140+00							
22	0.4050D+02-0.4150D+02	0.45970+00							
23	0.4150D+02-0.4250D+02	0.46790+00							
24	0.4250D+02-0.4350D+02	0.47620+00							
25	0.4350D+02-0.4450D+02	0.48450+00							
26	0.4450D+02-0.4550D+02	0.49280+00							
27	0.4550D+02-0.4650D+02	0.50110+00							
28	0.4650D+02-0.4750D+02	0.50940+00							
29	0.4750D+02-0.4850D+02	0.51770+00							
30	0.4850D+02-0.4950D+02	0.52590+00							
31	0.4950D+02-0.5050D+02	0.53420+00							
32	0.5050D+02-0.5150D+02	0.54250+00							
33	0.5150D+02-0.5250D+02	0.55070+00							
34	0.5250D+02-0.5350D+02	0.55890+00							
35	0.5350D+02-0.5450D+02	0.56710+00							
36	0.5450D+02-0.5550D+02	0.57520+00							
37	0.5550D+02-0.5650D+02	0.58330+00							
38	0.5650D+02-0.5750D+02	0.59140+00							
39	0.5750D+02-0.5850D+02	0.59950+00							
40	0.5850D+02-0.5950D+02	0.60730+00							
41	0.5950D+02-0.6050D+02	0.61520+00							
42	0.6050D+02-0.6150D+02	0.62300+00							
43	0.6150D+02-0.6250D+02	0.63080+00							
44	0.6250D+02-0.6350D+02	0.63850+00							
45	0.6350D+02-0.6450D+02	0.64610+00							
46	0.6450D+02-0.6550D+02	0.65370+00							
47	0.6550D+02-0.6650D+02	0.66110+00							
48	0.6650D+02-0.6750D+02	0.66850+00							
49	0.6750D+02-0.6850D+02	0.67580+00							
50	0.6850D+02-0.6950D+02	0.68310+00							
51	0.6950D+02-0.7050D+02	0.69020+00							
52	0.7050D+02-0.7150D+02	0.69730+00							
53	0.7150D+02-0.7250D+02	0.70420+00							
54	0.7250D+02-0.7350D+02	0.71110+00							
55	0.7350D+02-0.7450D+02	0.71790+00							
56	0.7450D+02-0.7550D+02	0.72450+00							
57	0.7550D+02-0.7650D+02	0.73110+00							
58	0.7650D+02-0.7750D+02	0.73760+00							
59	0.7750D+02-0.7850D+02	0.74400+00							
60	0.7850D+02-0.7950D+02	0.75020+00							
61	0.7950D+02-0.8050D+02	0.75640+00							
62	0.8050D+02-0.8150D+02	0.76250+00							
63	0.8150D+02-0.8250D+02	0.76840+00							
64	0.8250D+02-0.8350D+02	0.77430+00							
65	0.8350D+02-0.8450D+02	0.78000+00							
66	0.8450D+02-0.8550D+02	0.78570+00							
67	0.8550D+02-0.8650D+02	0.79120+00							
68	0.8650D+02-0.8750D+02	0.79670+00							

図5.

標であるといえよう。また、もう一方のK型調査票の分析結果によると、#2.8「一生楽に生活できるお金がたまれば仕事をやめる」といった意見も若者に多い。このような価値観における老若の相異、殊に若年層の強い個人化志向は、若者も依然として旧来の人間関係温存型の考えをもつ、というこれまでの記述と整合的であるといえるであろうか。

魚に水のことを聞き、鳥に空気のことを尋ね、その結果から水や空気的重要性をしめすことは至難である。同様に、人々にとって空気にも似た存在である人間関係に関してその変容を析出することもやはり困難である。しかし、他の諸領域における意識が変るように、程度の差こそあれ、人間関係観もまた変ると見るのは自然であろう。53年調査時点で20歳の人は昭和32、33年に生れた人々である。このような人々に代表される若年層が都市化・核家族化等の進行によってもたらされた孤立的な社会環境の下で成長し、したがってナマの人間関係のトレーニングの機会が少なく、実際に強い個人化志向をもつことを考えると、それは決して人間関係観とも無縁ではないと思われる。実際、つぎにしめすように、以上の人間関係観とは異なった様相をしめす調査結果も見い出せるのである。

1つは前出の#5.6e 課長——ヨメの世話の質問である。この質問に対して「いい感じ」という

NO.	CLASS BOUNDARIES	ESTIMATED PROBABILITIES	ESTIMATED PROBABILITIES					
			0.0	0.2000+00	0.4000+00	0.6000+00	0.8000+00	0.1000+01
1	0.1950+02~0.2050+02	0.61730+00	0.10000+00	0.30000+00	0.50000+00	0.70000+00	0.90000+00	
2	0.2050+02~0.2150+02	0.61910+00						
3	0.2150+02~0.2250+02	0.61890+00						
4	0.2250+02~0.2350+02	0.61980+00						
5	0.2350+02~0.2450+02	0.62060+00						
6	0.2450+02~0.2550+02	0.62150+00						
7	0.2550+02~0.2650+02	0.62230+00						
8	0.2650+02~0.2750+02	0.62310+00						
9	0.2750+02~0.2850+02	0.62400+00						
10	0.2850+02~0.2950+02	0.62480+00						
11	0.2950+02~0.3050+02	0.62560+00						
12	0.3050+02~0.3150+02	0.62650+00						
13	0.3150+02~0.3250+02	0.62730+00						
14	0.3250+02~0.3350+02	0.62810+00						
15	0.3350+02~0.3450+02	0.62900+00						
16	0.3450+02~0.3550+02	0.62980+00						
17	0.3550+02~0.3650+02	0.63060+00						
18	0.3650+02~0.3750+02	0.63150+00						
19	0.3750+02~0.3850+02	0.63230+00						
20	0.3850+02~0.3950+02	0.63310+00						
21	0.3950+02~0.4050+02	0.63390+00						
22	0.4050+02~0.4150+02	0.63480+00						
23	0.4150+02~0.4250+02	0.63560+00						
24	0.4250+02~0.4350+02	0.63640+00						
25	0.4350+02~0.4450+02	0.63720+00						
26	0.4450+02~0.4550+02	0.63810+00						
27	0.4550+02~0.4650+02	0.63900+00						
28	0.4650+02~0.4750+02	0.63970+00						
29	0.4750+02~0.4850+02	0.64050+00						
30	0.4850+02~0.4950+02	0.64130+00						
31	0.4950+02~0.5050+02	0.64220+00						
32	0.5050+02~0.5150+02	0.64300+00						
33	0.5150+02~0.5250+02	0.64380+00						
34	0.5250+02~0.5350+02	0.64460+00						
35	0.5350+02~0.5450+02	0.64540+00						
36	0.5450+02~0.5550+02	0.64620+00						
37	0.5550+02~0.5650+02	0.64710+00						
38	0.5650+02~0.5750+02	0.64790+00						
39	0.5750+02~0.5850+02	0.64870+00						
40	0.5850+02~0.5950+02	0.64950+00						
41	0.5950+02~0.6050+02	0.65030+00						
42	0.6050+02~0.6150+02	0.65110+00						
43	0.6150+02~0.6250+02	0.65190+00						
44	0.6250+02~0.6350+02	0.65270+00						
45	0.6350+02~0.6450+02	0.65350+00						
46	0.6450+02~0.6550+02	0.65430+00						
47	0.6550+02~0.6650+02	0.65510+00						
48	0.6650+02~0.6750+02	0.65590+00						
49	0.6750+02~0.6850+02	0.65670+00						
50	0.6850+02~0.6950+02	0.65750+00						
51	0.6950+02~0.7050+02	0.65830+00						
52	0.7050+02~0.7150+02	0.65910+00						
53	0.7150+02~0.7250+02	0.65990+00						
54	0.7250+02~0.7350+02	0.66070+00						
55	0.7350+02~0.7450+02	0.66150+00						
56	0.7450+02~0.7550+02	0.66230+00						
57	0.7550+02~0.7650+02	0.66310+00						
58	0.7650+02~0.7750+02	0.66390+00						
59	0.7750+02~0.7850+02	0.66470+00						
60	0.7850+02~0.7950+02	0.66550+00						
61	0.7950+02~0.8050+02	0.66630+00						
62	0.8050+02~0.8150+02	0.66710+00						
63	0.8150+02~0.8250+02	0.66790+00						
64	0.8250+02~0.8350+02	0.66870+00						
65	0.8350+02~0.8450+02	0.66950+00						
66	0.8450+02~0.8550+02	0.67020+00						
67	0.8550+02~0.8650+02	0.67100+00						
68	0.8650+02~0.8750+02	0.67180+00						

図 6.

回答肢を選択する確率の推定値^{※3)}を、石黒・坂元(1983)のベイズ型2値回帰モデルを用いて、1歳毎に求めると図5のようになる。手法の技術的な説明が本稿の主題ではないのでそれについては稿を改めるが、図5は「いい感じ」という意見が、20歳の30.0%から87歳の79.7%へ、加齢とともに増加し、老若で多数意見が逆転してしまっていることをしめしている。因に、前掲の#5.6f—引越しの質問に対する「いい感じ」の選択確率の推定値は図6のようになる。これは「いい感じ」が、20歳の61.7%から87歳の67.2%へ、わずか5.5%しかふえず、老若によらずこの意見が多数意見であることをしめしている。単純集計(回答肢に関する1次元の度数分布)で見れば、既に述べたように、2つの質問とも旧来の人間関係依存型の意見が多数意見であったが、#5.6e 課長一ヨメの世話にあっては回答は年齢に大きく依存し、若年層は課長の嫁の世話に好感をもってはいないのである。

第2の例は昭和53年の第6次全国調査の直後の昭和54年2月に岐阜市で行なった567人のサンプルに対する調査結果で、質問文(以下「岐阜質問」と略称)はつぎのように変更されている。

NO.	CLASS BOUNDARIES	ESTMATED PROBABILITIES	0.0									
			0.10000+00	0.20000+00	0.30000+00	0.40000+00	0.50000+00	0.60000+00	0.70000+00	0.80000+00	0.90000+00	1.00000+00
1	0.19500+02	0.20500+02	0.77760+00									
2	0.20500+02	0.21500+02	0.77300+00									
3	0.21500+02	0.22500+02	0.76840+00									
4	0.22500+02	0.23500+02	0.76370+00									
5	0.23500+02	0.24500+02	0.75900+00									
6	0.24500+02	0.25500+02	0.75420+00									
7	0.25500+02	0.26500+02	0.74930+00									
8	0.26500+02	0.27500+02	0.74440+00									
9	0.27500+02	0.28500+02	0.73940+00									
10	0.28500+02	0.29500+02	0.73430+00									
11	0.29500+02	0.30500+02	0.72920+00									
12	0.30500+02	0.31500+02	0.72400+00									
13	0.31500+02	0.32500+02	0.71880+00									
14	0.32500+02	0.33500+02	0.71350+00									
15	0.33500+02	0.34500+02	0.70810+00									
16	0.34500+02	0.35500+02	0.70270+00									
17	0.35500+02	0.36500+02	0.69720+00									
18	0.36500+02	0.37500+02	0.69170+00									
19	0.37500+02	0.38500+02	0.68610+00									
20	0.38500+02	0.39500+02	0.68050+00									
21	0.39500+02	0.40500+02	0.67480+00									
22	0.40500+02	0.41500+02	0.66900+00									
23	0.41500+02	0.42500+02	0.66320+00									
24	0.42500+02	0.43500+02	0.65730+00									
25	0.43500+02	0.44500+02	0.65140+00									
26	0.44500+02	0.45500+02	0.64550+00									
27	0.45500+02	0.46500+02	0.63950+00									
28	0.46500+02	0.47500+02	0.63350+00									
29	0.47500+02	0.48500+02	0.62740+00									
30	0.48500+02	0.49500+02	0.62130+00									
31	0.49500+02	0.50500+02	0.61510+00									
32	0.50500+02	0.51500+02	0.60890+00									
33	0.51500+02	0.52500+02	0.60270+00									
34	0.52500+02	0.53500+02	0.59640+00									
35	0.53500+02	0.54500+02	0.59010+00									
36	0.54500+02	0.55500+02	0.58380+00									
37	0.55500+02	0.56500+02	0.57740+00									
38	0.56500+02	0.57500+02	0.57100+00									
39	0.57500+02	0.58500+02	0.56460+00									
40	0.58500+02	0.59500+02	0.55820+00									
41	0.59500+02	0.60500+02	0.55180+00									
42	0.60500+02	0.61500+02	0.54530+00									
43	0.61500+02	0.62500+02	0.53880+00									
44	0.62500+02	0.63500+02	0.53230+00									
45	0.63500+02	0.64500+02	0.52580+00									
46	0.64500+02	0.65500+02	0.51930+00									
47	0.65500+02	0.66500+02	0.51280+00									
48	0.66500+02	0.67500+02	0.50630+00									
49	0.67500+02	0.68500+02	0.49970+00									
50	0.68500+02	0.69500+02	0.49320+00									
51	0.69500+02	0.70500+02	0.48670+00									
52	0.70500+02	0.71500+02	0.48020+00									
53	0.71500+02	0.72500+02	0.47370+00									
54	0.72500+02	0.73500+02	0.46710+00									
55	0.73500+02	0.74500+02	0.46070+00									
56	0.74500+02	0.75500+02	0.45420+00									
57	0.75500+02	0.76500+02	0.44770+00									
58	0.76500+02	0.77500+02	0.44130+00									
59	0.77500+02	0.78500+02	0.43480+00									
60	0.78500+02	0.79500+02	0.42840+00									
61	0.79500+02	0.80500+02	0.42210+00									
62	0.80500+02	0.81500+02	0.41570+00									
63	0.81500+02	0.82500+02	0.40940+00									
64	0.82500+02	0.83500+02	0.40310+00									
65	0.83500+02	0.84500+02	0.39680+00									

図 7.

〔リスト〕 友だちの東君と西君とが雑談していたとき、自分の会社について、こんなことをいったとします。あなたは、どちらの会社の方が、いい感じがしますか？

- | | |
|--|---------------|
| <p>1 東君「うちの会社では、課長が部下のおヨメさんの世話もするし、逆に課長の引越しのときは、部下の方から進んで手伝いにく。だから仕事の上でも万事うまくいっている。」</p> <p>2 西君「うちの会社では、そういう私生活のつきあいは、なるべくしないようにしている。しかし、仕事の上ではたがいに遠慮なく意見をいえるので、万事うまくいっている。」</p> <p>3 その他〔話入〕</p> | <p>4 D.K.</p> |
|--|---------------|

結果は単純集計の段階でもこれまでの傾向とは逆になり、28% 対 65% で「私生活のつきあい」が忌避されている。さらに、この質問に対する回答が他のどのような項目と関連が深いかを CATDAP によって検討すると、実際のアウトプットは割愛するが、年齢と極めて強い関連をもつことがわかった。そこで、先のベイズ型 2 値回帰モデルを用いて、「会社では私生活のつきあいはしない」という回答肢を選択する確率の推定値^(*)を 1 歳毎に求めると図 7 のようになる。

図 7 は、「会社では私生活のつきあいはしない」という意見が、20 歳の 77.8% から 84 歳の 40.0% へ、年齢の増加とともに減少し、やはり老若で多数意見が逆転してしまっていることをしめしている。これまでの質問群に対して旧来の人間関係温存型の回答をしめた若者がこれらの 2 つの質問に対して逆の回答をするということは何を意味するのであろうか。ここでは今後の検討課題を明確にするために、このような回答結果を生んだ事情について若干の考察を試みてみたい。

まず第 1 に考えられることは、2 つの質問に共通して含まれる「課長がヨメの世話をした」という章句が回答者の反応を規定したという解釈である。この見方に立てば、これら 2 問の結果は、若者が課長の嫁の世話をいやがることをしめたものであるということになる。

第 2 には、「岐阜質問」に対する回答結果は、第 1 の事情だけでなく、「岐阜質問」に特有の文脈に起因する反応が複合されてもたらされた、という解釈が可能であろう。すなわち、「岐阜質問」が他の質問文と際だって異なる点は、この質問が新旧どちらの人間関係を採ろうとも期待される成果に異なるところはないと仮定した上でどちらの人間関係を選好するかを問題にしていることである。この点を重視すれば、この調査結果は、若年層は成果が同じなら人間関係温存型の態度を忌避するのに対して、高年層は成果が同じでも人間関係温存型の態度を選好する、と解釈できる。いま # 5.6e 課長－ヨメの世話を除外して考えることにすると、旧来の人間関係を採らなかつたときに予想される結果を明示していない他の質問に対しては若年層も人間関係温存型を志向したにもかかわらず、この質問に対しては態度を変えているのである。このことは若年層の人間関係温存型の態度は成果に依存して変るという解釈を可能にする。そしてもしこの解釈が可能であるとすれば、従来の日本人論に関する所説、たとえば先の浜口の所説とは対立的な知見を得ることになる。いい過ぎになることを恐れずに浜口の術語を用いて表現すれば、この解釈は、中高年層においては旧来の人間関係の温存志向が自己目的化しているのに対し、若年層においては手段視されている可能性があることになるからである。さらにこのことは、個人の意識の中での社会的な強制力が緩めば会社での人間関係の形態もまた充分に変質しうる可能性があることを示唆しているという解釈に発展する。

いうまでもなく、2 番目の回答結果には、調査地域が岐阜市に限られているという点、このような現象の認め始められた時期や加齢効果の程度が不明であるという点、等の制約がある。また、質問文の成分も多面的である。上述のどの要因に対する反応が規定的であるのかを明らかにするためには、少なくとも、① 特定の問題に限って老若の反応が異なるのか、それとも、② 人間関係観そのものの個人の価値体系における位置づけが老若によって異なるのか、について吟味を要すると考えられる。しかしいずれにせよ、以上の 2 つの調査結果は前述の若者の価値観、特に個人化志向と符合するものであり、若者の人間関係観には中高年層と相容れないものがあることは事実であろう。そしてこの見方は、若者の意識構造もまた旧態依然たる人間関係観と新しい価値観・生活感覚との並存状況にある、とする見方より自然で説得的ではなからうか。

4. むすびにかえて

すでに第2節で見たように最近の意識動向の一つの特質として伝統回帰という点を指摘した。そしてその変化は伝統回帰とは言っても同一空間上の単純な回帰ではなく、いわばせん状の回帰的な変化であり、それを旧来の質問で反映しうる空間に射影すれば単純な伝統回帰の如き観を呈するというに過ぎないであろう(他の質問群^{註4)}についての同様な指摘については鈴木(1982)を参照)。出発点と回帰点のくいちがいが新しい質問によって写しとられねばならない人間関係観のもう一つの座標軸であり、この座標軸が基本的には経済社会的環境要因の変容に根ざす価値観の変化と強い関係を持っていると考えられる。この点こそが将来「日本人の国民性調査」で描出すべき重要な課題の一つではなかろうか。人間関係の形態こそが多くの社会科学の永遠のテーマであるばかりでなく、人間関係こそが経済・社会システムの基底にあってそれらを支える基盤をなすからである。

謝 辞

これまでの数多くの実査に当って御協力いただいた多くの大学の先生と学生調査員の方々に感謝します。また、ペイズ型2値回帰モデルを共同開発した石黒真木夫氏、プログラムの開発や計算に当って終始御協力いただいた桂康一氏、筆者の研究の基礎作業に従事して下さった太田岭子氏に心から感謝します。

注1) 図1と図4で採用した質問と回答肢およびその3領域への分類記号は以下のとおりである。なお、黒印の分類記号は「調査開始時」が昭和28年であることを、白ヌキの分類記号は「調査開始時」が33年もしくは38年であることを表わす。

1. #2.1 しきたりに従うか—従え(■)
2. #2.4 くらし方—のんきに(▲)
3. #2.5 自然と人間の関係—自然に従え(▲)
4. #3.1 宗教を信じるか—信じている(△)
5. #3.2 宗教心は大切か—大切(△)
6. #3.9 首相の伊勢参り一行かねばならないと行った方がよいの合計(●)
7. #4.4 先生が悪いことをした—そんなことはないという(▲)
8. #4.5 子供に金は大切と教える—賛成(▲)
9. #4.10 他人の子供を養子にするか—つがせる(■)
10. #4.11 先祖を尊ぶか—尊ぶ(▲)
11. #5.1 恩人がキトクのとき—故郷へ帰る(■)
12. #5.1b 親がキトクのとき—故郷へ帰る(■)
13. #5.1c-1 入社試験—親戚を採用(○)
14. #5.1c-2 入社試験—恩人の子を採用(○)
15. #5.1d 大切な道徳—親孝行と恩返し of 組合せ(○)
16. #5.6 めんどろをみる課長—めんどろをみる(■)
17. #6.2 男・女の生れかわり—男に(△)
18. #6.2c 苦労どちらが多いか—女が多い(△)
19. #6.2d 楽しみどちらが多いか—女が多い(△)
20. #7.1 人間らしさはへるか—へる(▲)
21. #7.2 心の豊かさはへらないか—へる(▲)
22. #7.4 日本と個人の幸福—日本がよくなって個人が幸福(●)
23. #7.5b 公益と個人の権利—公共の利益(○)
24. #8.6 選挙への関心—なにをおいても投票(○)
25. #8.7 支持政党—自民党(●)

注2) 図2中の昭和5年, 15年の数値はいずれも壮丁検査の際に実施された調査から得られたものであり, いわゆる世論調査によるものではない。これについての詳細な分析は林(1982)を参照されたい。

注3) クロス表を用いてある意見の支持率と年齢との関係を見るような場合, 通常, 年齢を5歳区分や10歳区分というように機械的に区分して分析することが多いが, このような方法が時として不明瞭な知見しか与えないことは明らかである。たとえば岐阜調査の質問の場合, 年齢を5歳区分としたときのクロス表は表4のようになり, 「会社では私生活のつきあいはいらない」という意見の支持率は各年齢層で不規

表4.

	1. 私生活のつき あいがいい	2. 私生活のつき あいが悪い, 他	計 (該当 サンプル数)
1. 20~24歳	60.5 %	39.5 %	100.0 % (43)
2. 25~29	77.9	22.1	100.0 (68)
3. 30~34	72.5	27.5	100.0 (69)
4. 35~39	69.3	30.7	100.0 (75)
5. 40~44	70.0	30.0	100.0 (60)
6. 45~49	73.6	26.4	100.0 (72)
7. 50~54	52.0	48.0	100.0 (50)
8. 55~59	64.3	35.7	100.0 (42)
9. 60~	45.5	54.5	100.0 (88)
計	65.1	34.9	100.0 (567)

表5.

	1. 私生活のつき あいがいい	2. 私生活のつき あいが悪い, 他	(該当 サンプル数)
1. ~20歳	87.5 %	12.5 %	100.0 % (8)
2. 21~24	54.3	45.7	100.0 (35)
3. 25~32	77.7	22.3	100.0 (112)
4. 33~35	56.1	43.9	100.0 (41)
5. 36~50	73.3	26.7	100.0 (202)
6. 51~68	55.5	44.5	100.0 (137)
7. 69~75	25.0	75.0	100.0 (20)
8. 76~78	75.0	25.0	100.0 (4)
9. 79~84	12.5	87.5	100.0 (8)
計	65.1	34.9	100.0 (567)

則な変動をしめし, その特徴を把握することが困難である。CATDAP-02は, このような問題に対して, 支持率のいわば変曲点を的確に捉え最適な区分点を求めることによって安定的な推定値を得ることをめざしているが, この質問の場合はこの方法によっても, 表5のように, 明確な結論を得ることができない。これは上の2つの方法がいずれも年齢という連続変量を離散化する際に, "連続"という情報を捨て去ったことに起因する(坂元・石黒・北川(1983, 90頁))。ベイズ型2値回帰モデルはこのような場合にヨリ正確な推定値を得るために開発されたものである。最適な区分点を求めるのではなく良い推定値を求めることが目的となるこの問題のような場合には, この方法がCATDAPより有効である。なお, 図5~7では確率の推定値がほぼ直線的に変化しているが, この方法は確率が滑かに変動する限り, 任意の形で変動する確率の推定値を与える。しかしこれらの点の詳細な説明については稿を改める。

注4) #2.1, #2.5, #4.4, #4.5, #5.1, #5.6, #8.1

参 考 文 献

- 土居健郎 (1971). 「甘え」の構造, 弘文堂, 東京.
- 浜口恵俊 (1982). 間人主義の社会 日本, 東洋経済新報社, 東京.
- 林知己夫 (1982). 日本人の生きがいの変遷, 教育と医学, 4月号, 12-22.
- Ishiguro, M. and Sakamoto, Y. (1983). A Bayesian approach to binary response curve estimation, *Ann. Inst. Statist. Math.*, B, 35, 1, 115-137.
- Katsura, K. and Sakamoto, Y. (1980). CATDAP, A categorical data analysis program package, *Computer Science Monographs*, 14, 1-73.
- 中村 隆 (1982). ベイズ型コウホート・モデル, 統計数理研究所彙報, 29, 2, 77-97.
- 中村 隆 (1983). 女性の意見の世代差, 日本人研究シリーズ7 日本の女性の生き方 (杉山明子編), 出光書店, 東京, 43-83.
- 中根千枝 (1965). タテ社会の人間関係, 講談社現代新書105, 講談社, 東京.
- 西平重喜 (1980). 世論調査にみる同時代史-1 日本人の考え方の変化, 自由, 22, 9, 18-27.
- 坂元慶行 (1980). カテゴリカルデータにおける変数選択プログラム CATDAP を中心に, 統計数理研究所彙報, 28, 1, 135-155.
- 坂元慶行 (1983). 日本人の国民性, 発達心理学への招待 7, 文化のなかの人間 (永野重史, 依田明編), 新曜社, 東京, 199-214.
- 坂元慶行, 石黒真木夫, 北川源四郎 (1983). 情報量統計学, 情報科学講座 A5.4, 共立出版, 東京.
- 鈴木達三 (1982). 国際比較の方法, 数理科学, 230, 7-20.
- 統計数理研究所国民性調査委員会 (1961). 日本人の国民性, 至誠堂, 東京.
- (1970). 第2 日本人の国民性, 至誠堂, 東京.
- (1975). 第3 日本人の国民性, 至誠堂, 東京.
- (1982). 第4 日本人の国民性, 出光書店, 東京.

A New Aspect of the Opinion Trend in Japan
— Changing Attitude toward Personal Relations —

Yosiyuki Sakamoto

(The Institute of Statistical Mathematics)

The study of Japanese national character by the Research Committee of the Institute originated with the first nation-wide survey in 1953, and since then a similar survey has been conducted every five years. Most of questionnaire items in each survey were identical to those utilized in the first survey and the analysis of the survey results of such items has definitely shown the characteristic that new attitudes toward political problems and daily life coexist with a traditional outlook on personal relations. However, the latest value system of the young has contrasted in a striking way with that of the old. In the present paper we examine the salient points of difference between the value system of the young and that of the old and clarify that they have different attitudes even toward personal relations. For those purposes we used a program package CATDAP, which realizes the variable selection in categorical data, and a Bayesian technique for a response curve estimation.